

今後の北特研の在り方について

(答申)

平成27年11月26日

北海道特別支援教育研究協議会
第三者委員会

はじめに

平成26年7月に行われた北海道特別支援教育研究協議会（以下、北特研）全道研究協議会の総会において、今後の北特研の在り方について検討を行う必要性が確認され、検討委員会を立ち上げ、同年9月と10月の2回、「今後の在り方検討会議」を開催した。

その検討の概要は次のとおりである。

- ① 「会員数を増やすこと」と「魅力ある研究大会づくり」の関係は、因果関係がはっきりするものではないので切り離して考える。この2年間事務局は「研究大会の充実」を目指してきた。
- ② 1年次の地区研究大会には、事務局からそれぞれ複数の職員が参加し、各地区の特色や良さを感じるとともに、センター的機能を発揮していることを再確認できた。2年次の全道研究大会では、全道の特別支援学校から参加があり、全道の情報交流ができ、他校を知って自校の良さを知るなど多くのメリットが感じられ、ネットワークの大切さを確認できた。一方で、毎年全道研究大会を開催することが望ましいとの意見もある。
- ③ 部会の設定について、運営校の大会コンセプトや地域のニーズなどに応じて設定できるように変更することが望ましい。若い先生方が十分に話ができる場を設定することも魅力の一つとなるのではないか。
- ④ 会員は「何を学びたいのか」「何を重視しているのか」などの調査研究も必要ではないか。
- ⑤ 総括事務局だけで、方向性を示すことには限界があるため、「第三者委員会」を立ち上げ、そこで「研究大会の開催について」や「会員増に向けて」など、北特研の課題を検討し、その答申に基づいて今後の方向性を提案してはどうか。

「今後の在り方検討」に向けて、総括事務局が通常の協議会の運営に加え、今後の方向性を示すには負担が大きいことから、会長の諮問機関として「第三者委員会」が設置されることとなった。

「第三者委員会」としては、北特研会長から「北特研における全道大会の開催」及び、「会員の増加のための具体的な取組内容と方法」についての諮問を受け、「今後の在り方検討会議」の協議を踏まえつつ、4回にわたり「第三者会議」を開催し、検討を行った。

今般、これまでの「第三者委員会」における協議・検討の成果を取りまとめ、答申として北特研会長に提出するものである。

1 「北特研」の果たしてきた役割・成果について

「北特研」の前身である「北海道精神薄弱養護学校教育研究協議会（北精研）」は、昭和54年の養護学校義務化をきっかけに、知的障害養護学校の教育の充実と発展に寄与する団体として設立された。

はじめに、本研究協議会のこれまでの経緯について概観しておきたい。

本研究協議会は、昭和54年11月8日・9日、第1回北海道精神薄弱養護学校教育研究協議会研究大会として、札幌養護学校を会場に開催された。

その後、平成11年4月1日、「精神薄弱の用語の整理のための関係法律の一部を改正する法律」の施行により、「精神薄弱者」が「知的障害者」に改められたことを受け、平成11年度に「北海道知的障害養護学校教育研究協議会（北知研）」と会の名称を変更した。

また、平成19年4月1日より特別支援教育が法的に位置付けられた改正学校教育法が施行されることを踏まえ、「北海道特別支援教育研究協議会（北特研）」と会の名称を変更し現在に至っている。

北精研の設立から36年目を迎えた本会は、本道における知的障害養護学校の教育の基盤をつくとともに、特別支援学校（知的障害）の教育の質的向上に大きく貢献してきた研究団体である。

これまで本研究協議会の部会構成としては、設立当時から平成13年度までは、「日常生活の指導」、「遊びの指導」、「生活単元学習」、「作業学習」、「教科学習」、「自立活動」、「高等部」、「訪問教育」、「寄宿舍（小・中）」、「寄宿舍（高）」、「健康・安全」など指導の形態別や課題別の部会構成、平成14年度からは「生活を整える」、「豊かに表す」、「経験を広げる」、「自らひらく」の4つのテーマ別部会構成とし、また、平成21年度からは、日々の実践に応じた部門別の部会構成として「小学部会」「中学部会」「高等部会」「訪問教育・重度重複部会」「寄宿舍部会」を基本部会とすると共に地区の実態に応じて「特設部会」も独自に設定できるようにするなど、各時代のニーズに応じた変遷をとげてきた経過がある。

このように「特殊教育」から「特別支援教育」への移行に伴って上記の役割を果たしてきた本会であるが、今後、特別支援教育が共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育システム構築のために必要不可欠なものであるとされているように、知的障害教育の今日的なニーズに即応しつつ、インクルーシブ教育システム構築に向けた本会の役割を一層明確にしていくことが求められる。

これらを踏まえ、本会会則第2章「目的・事業」の第4条（目的）について、

「この会は、北海道における特別支援学校（知的障害部門）の教育に関する研究をすすめ、インクルーシブ教育システム構築の充実、発展に寄与することを目的とする。」

と明記することを提案したい。

2 北特研の会員・運営の現状について

北特研の会員数は、この10年間で40%（平成16年度：1,020名→平成26年度：603名）減少となり、これに伴い会費収入も126万円減少している。

会員の推移としては、平成13年度から平成20年度までの減少が著しいが、平成21年度から平成27年度までの5年間の会員数は、ほぼ横ばい（600～700名）で推移している。

会員数が減少している状況は、北特研に限らず各種研究団体等でも同様の課題が報告されているところであり、児童生徒の障がいの重度・重複化、多様化に応じた研修機会の多様性が拡大してきていることや、情報化社会の進展に伴いインターネット等を通じて必要な情報の入手が比較的容易になってきていることなど、複数の背景要因が複雑に絡み合っている課題であると認識することが必要であると考えられる。

したがって、現在の会員数を基盤とした「持続可能な運営体制」を検討するとともに本会だからこそ可能となる「会員のニーズに応じた魅力ある事業」を構想し、企画・実施していく努力が今後求められてくるものと考えられる。

3 北特研における全道研究大会の開催について

全道大会の開催の検討に当たっては、「平成29年度からの全道大会の開催スパン」及び「全道研究大会の開催案に伴う、平成29年度からの事務局（総括事務局と地区事務局）の在り方」について考え方を整理するとともに、「地区研究大会」と「全道研究大会」の開催の価値や意義について再検証した。

現行の北特研の全道大会及び地区大会の開催については、北特研運営細則第17条1で「研究1年次は地区研究大会を開催し、2年次には全道研究大会を行う。」とされ、同運営細則第18条で「地区研究大会は、次の4つの地区で開催する。また、輪番制で地区研究大会（兼全道研修会）として位置付けをして開催する。」とされている。

「地区研究大会」については、特別支援学校会員以外の参加状況やアンケート調査の結果等から、地区・圏域の外部ニーズに対応している実態がある。北特研の役割を踏まえると、研究協議会の開催を通じて特別支援学校のセンター的機能を果たすことも重要な目的の一つと考えられることから、地域での大会開催の意義が今後これまで以上に重要視されると考える。

なお、インクルーシブ教育システム構築に向け、他の特別支援教育関係研究団体等と連携し開催するなど各地域における北特研及び各研究団体の存在価値や意義を高める取組を工夫しすすめることも一つの方策と考えられるが、今後の検討課題として確認しておきたい。

一方で、「地区研究大会」開催の地域構成については、圏域や移動ルートを考慮したり、参集する学校の固定化・マンネリ化を防ぐため、会場校や会員の負担感を払拭するため4年に1度その構成を見直すなどを検討する。

「全道研究大会」については、会員のニーズに応じた部会構成や研修方法を工夫して実施することで会員や参加者の満足度が高まることが明らかになっている。また、地区大会では構成できない参加規模の部会設定が可能となり、協議の深まりが期待できる。

このような「地区研究大会」や「全道研究大会（全道研修会）」の目的や意義を考えたとき、全道研究大会の開催スパンについては、現状のシステムが効果的な開催方法であると考えられる。

全道研究大会の開催に伴う「総括事務局」と「地区事務局」の在り方について、「総括事務局」は、北特研としての「学びのテーマ（研修テーマ）」をいくつか設定するなど、全体的なフレームを提示することとし、「地区事務局」が地区ごとのニーズに応じて主体的・個性的に企画・運営ができるよう支援することが期待される。

また、「地区事務局」は、当該地区の会員へ北特研「研修会助成金制度」の周知を図り、「研修会」、「講演会」、「セミナー」などを積極的に開催し、当該地区及び全道の会員の参加を促すなど、一校に限らず各地区や会員の研究の充実をより一層図るための取組を進め、「地区事務局」としての主体性を確保していくことも重要な方策であろう。

なお、「全日本特別支援教育研究連盟（全特連）」との関係から「地区研究大会」の4会場のうち1会場は、従来どおり「全道研修会」として位置付けることが望ましい。

4 会員の増加のための具体的な取組内容と方法について

この諮問事項に関して、2でも触れたように、会員の減少が、本会の価値が減少したことによるものとするよりは、時代の変化とともに教職員のニーズや研修形態が多様化したことが一因であるとも考えられることから、「第三者委員会」としては、会員の増加のための具体的な方策提案とするよりは、現在の会員数を基盤とした「持続可能な運営体制」や、本会だからこそ可能となる「会員のニーズに応じた魅力ある事業」を構想する方向で検討することがより望ましいと考えるに至った。

このため、大会の運営改善のために大会のテーマ設定や運営方法、全体的な評価等について、会員、非会員を問わず定期的なアンケート調査の実施し、教職員のニーズ把握や主体的な参画を促す方策を検討することが大切であると考えます。

また、新しい時代の知的障害教育の在り方を考える場としての「北特研」をアピールしたり、「北特研」の存在意義をアピールするため、知的障害教育やインクルーシブ教育システム構築に係る提言が出せるように工夫することも考えられる。

会員の満足度を高めるため、教職員の専門性・資質能力の向上のための研修手法や扱うテーマ、部会構成などを工夫することが重要である。

時代の変化に対応した研修ができる場としての存在価値を高めるためには、いわゆる「AL研修（アクティブラーニング型研修）」など、研修プログラムの開発にも努めることが重要であろう。

「全道研究大会」の部会構成については、例えば、

- 「喫緊の課題」：学習指導要領の改訂、新しい高等部への移行、高等支援学校の新設に係る課題、社会に開かれた教育課程、教育課程と一体化した評価、等
- 「校種・学部ごとの課題」：小・中学部、義務併置高等部、高等支援学校等（その他、小学校、中学校、高等学校も考えられる）
- 「障害の状態に対応する課題」：発達障害、重度重複障害、訪問教育、医療的ケア等
- 「教育課題」：キャリア教育、教科別の指導、教科等を合わせた指導、授業づくり、自立活動（自閉症への対応含）、アクティブ・ラーニング、道徳教育、カリキュラムマネジメント、交流及び共同学習、外国語学習、合理的配慮（個別の教育支援計画）、「チーム学校」の在り方、連続性のある多様な学びの場（校種・学部間接続を含）、主権者教育、等）

- 「職種別課題」：(寄宿舍指導員、実習助手、養護教諭、栄養教諭、専門支援員、スクールバス添乗員等)
などが考えられる。

小・中学校、高等学校の教職員、関係機関の職員、特別支援教育に関する専門職（S T、O T、P T）などの非会員の参加も推進し、当日会員として会費を徴収し、会員数の確保について検討する。

北特研としての魅力をつくり続ける努力を重ねることを通じて、「参加して良かった」という会員の実感・経験生み出すことが大切であり、このことが結果として会員の増加につながっていくのではないかと考えている。

おわりに

現在、中央教育審議会等において、2030年までの社会変化を視野に入れた教育改革及び学校改革が検討されている。また、これらに応じるように「これからの学校教育を担う教育の資質能力の向上について（中間まとめ）」（平成27年7月）も出され、これからの特別支援学校は共生社会の形成に向けた特別支援教育の役割を着実に果たしていくと共に、社会の著しい変化に対応する教育への転換が求められることになり、そのためには教職員個々の生涯に渡る主体的かつ不断の「学び」が不可欠とされている。

そして、このような変化は、これまで「独自性」が強いとされてきた知的障害教育においても同様に課せられる教育課題である。

本「第三者委員会」としては、このように予測される社会変化の中で、これまで果たしてきた北特研の役割を認識しつつ、今後一層価値が高まるであろう本会の重要性を更に確認するに至った。そして、その中核に存在すべきことは会員個々の「主体的な学び」、そして「自発的な参画」である。

北特研に対する改革の方向性が会員の中で共有され、新しい時代にふさわしい研究活動が実現されることを切に願う次第である。

「今後の北特研の在り方についての検討委員会」委員

区 分	氏 名	所 属
北海道特別支援学校知的障害教育校長会	嵯 峨 豪	北海道南幌養護学校
北海道特別支援学校知的障害教育副校長・教頭会	日 向 正 明	北海道札幌養護学校
北特研会長	木 村 健 治	北海道新篠津高等養護学校
北特研副会長	池 上 修 次	札幌市立豊明高等養護学校
北特研副会長	高 橋 勝 利	北海道北見支援学校
北特研次期事務局校代表	松 見 浩 平	札幌市立豊明高等養護学校
北特研総括事務局員	佐 伯 正 文	北海道新篠津高等養護学校

オブザーバー	木 村 宣 孝	北海道立特別支援教育センター所長
オブザーバー	上 村 喜 明	北海道立特別支援教育センター教育課長

○第1回 今後の在り方検討会議

期 日：平成26年9月19日（金）

会 場：北海道新篠津高等養護学校

協議事項：1 全道研究大会の開催について

2 研究部会の設定について

○第2回 今後の在り方検討会議

期 日：平成26年10月10日（金）

会 場：北海道新篠津高等養護学校

協議事項：1 今後の北特研の在り方について

「第三者委員会」委員

氏 名	所 属
木 村 宣 孝 (委員長)	北海道立特別支援教育センター 所長
嵯 峨 豪	北海道南幌養護学校 校長 (北海道特別支援学校知的障害教育校長会)
日 向 正 明	北海道札幌養護学校 副校長 (北海道特別支援学校知的障害教育副校長・教頭会)
山 末 隆	北海道小樽高等支援学校 教諭 (平成29年度北特研総括事務局校代表)
松 見 浩 平	札幌市立豊明高等養護学校 教諭 (平成27年度北特研総括事務局代表)

○第1回 第三者会議

期 日：平成27年3月16日（月）

会 場：北海道新篠津高等養護学校

意見交換：今後の北特研の在り方について

○第2回 第三者会議

期 日：平成27年4月30日（木）

会 場：札幌市立豊明高等養護学校

意見交換：諮問事項に係る意見交換

○第3回 第三者会議

期 日：平成27年10月2日（金）

会 場：札幌市立豊明高等養護学校

意見交換：諮問事項に係る意見交換

○第4回 第三者会議

期 日：平成27年11月18日（水）

会 場：札幌市立豊明高等養護学校

意見交換：「今後の北特研の在り方について（答申）素案」に係る意見交換

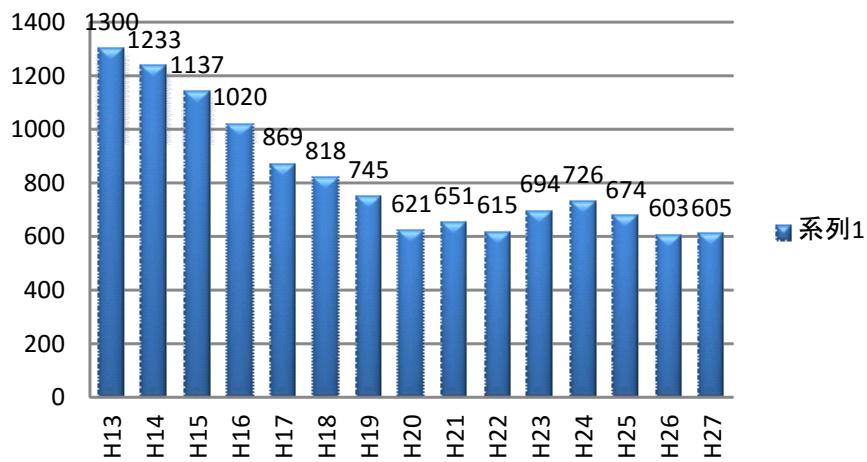
平成27年度 北特研総括事務局

役 職	氏 名	所 属
会 長	池 上 修 次	札幌市立豊明高等養護学校 校長
事務局長	西 川 浩 司	札幌市立豊明高等養護学校 教頭
事務局次長	松 見 浩 平	札幌市立豊明高等養護学校 教諭
事務局員	菅 原 尚 俊	札幌市立豊明高等養護学校 教諭
事務局員	竹 内 宏 明	札幌市立豊明高等養護学校 教諭
事務局員	佐 野 真 弓	札幌市立豊明高等養護学校 教諭

■ 資料 ■

1 北特研会員数の推移

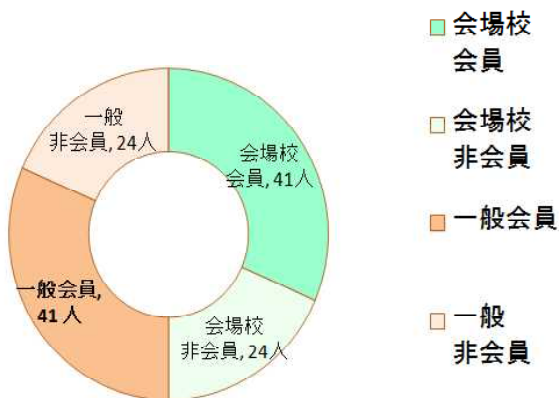
北特研 会員数の推移



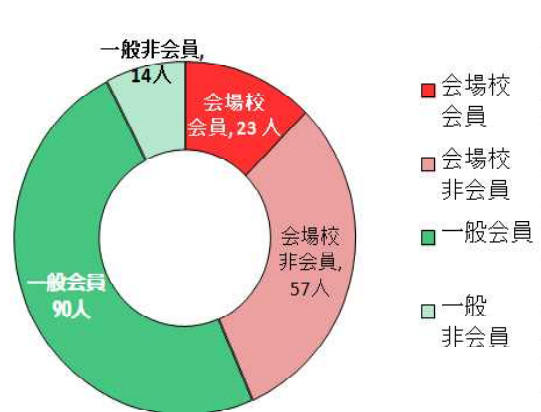
H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
1300	1233	1137	1020	869	818	745	621	651	615	694	726	674	603	605

2 各地区研究大会における参加者の内訳（会員・非会員の割合）

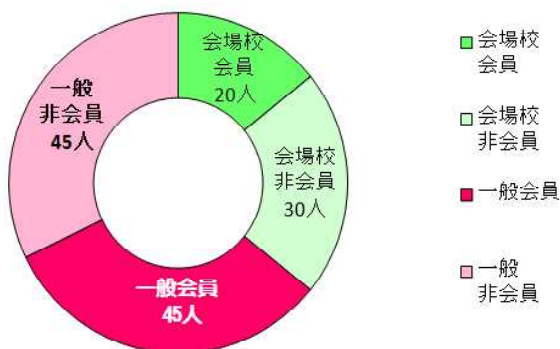
道南(平取) 参加者130名 来場者65名



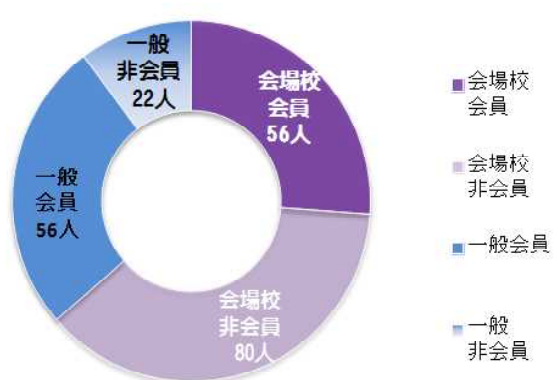
道央(南幌) 参加者184名 来場者147名



道北(鷹栖) 参加者数140名 来場者90名



道東(釧路) 参加数170名 来場者102名



■資料■ 「北特研」の歴史

月日	総括事務局	大会や部会の構成など	特記事項
H5.4		<ul style="list-style-type: none"> ・北精研 ・第32回全特連全国大会北海道大会 ・主幹～琴似中 ・会場～札幌、白樺 	
H10.4	新篠津高養 H9-10 大塚校長	<ul style="list-style-type: none"> ・北精研最後の年（集録発行段階では北知研） ・第10次研究 2年目 ・第20回研究大会 道東：帯広養護 10/22-23 250名参加 ・会員数1200名 ・分科会は11（あそびの指導、日常生活指導、生活単元学習、教科学習、自立活動、訪問教育、作業学習、寄宿舍（小中）、寄宿舍（高）、高等部、健康・安全） 	<ul style="list-style-type: none"> ・S54.北精研発足当時の会員450名 ・毎年、全道大会の時代 ・20年目～組織が大きくなるに伴い運営や研究活動に課題。事務局は、ここ数年の課題を整理し、改善の方向性を示した。
H11.4	星置養護 H11-12 佐藤校長	<ul style="list-style-type: none"> ・北知研 ・第10次研究 3年目 ・第21回研究大会 札幌大会 星置養護 10/21-22 350名参加 公開授業、総会、講演会、部会 ・部会は11 	<ul style="list-style-type: none"> ・「北海道知的障害養護学校教育研究協議会」として名称も新たにスタート ・課題～会員数の停滞、研究の継続性、会員の大会参加の在り方、各校の研究課題との関連
H12.4		<ul style="list-style-type: none"> ・第10次研究 4年目 研究のまとめ ・第22回研究大会 室蘭大会 10/26-27 ・部会は11 	<ul style="list-style-type: none"> ・事務局として専門性を高める研修会組織とするために方向性を明らかにする大会。2年間に亘りアンケート調査を行い会員の意見を反映した組織改革
H13.4	白樺高養 H13-14 川上校長	<ul style="list-style-type: none"> ・第40回全特連全国大会 北海道大会 ・主幹～北知研 ・第23回研究大会 札幌大会 	
H14.4		<ul style="list-style-type: none"> ・第24回研究大会 道南 9/20 平取 道央 9/20 豊明 道北 10/4 鷹栖 道東 10/4 釧路 ・研究報告会 10/18 白樺 ここで総会、各地区の大会の報告、シンポジウム、講演 ・部会構成を4部会に一新 「生活を整える～コミュニケーションの指導」「豊かに表す～生き生きとした表現活動」「経験を広げる～金銭や交通機関、公共施設の利用」「自らひらく～進路指導の充実とネットワーク作り」 	<ul style="list-style-type: none"> ・改善計画に基づく、新生北知研の新システム、新体制による活動。ブロック方式による地区大会を開催。研究報告会も1日日程で開催。 ・5つの大会を開催。

月日	総括事務局	大会や部会の構成など	特記事項
H15.4	札幌高養 H15-17 3年間 板垣校長	<ul style="list-style-type: none"> 第 25 回研究大会 道南 9/19 今金 道央 10/3 もなみ 道北 10/3 稚内 道東 10/3 ひまわり 報告会 10/10 4 地区の成果報告会、総会 第 11 次研究 4 年計画の 2 年目 	<ul style="list-style-type: none"> 新方式による大会が成功裏に終了 総括事務局 3 年間 1, 2 年目地区大会と報告会 3 年目 全道大会
H16.4		<ul style="list-style-type: none"> 第 26 回研究大会 道南 10/1 七飯 道央 10/1 共栄 道北 9/24 小平 道東 10/1 紋別 報告会 10/15 4 地区の成果報告会、総会 第 11 次研究 4 年計画の 3 年目 	
H17.4	高橋校長	<ul style="list-style-type: none"> 第 27 回研究大会 全道大会 10/6-7 (木・金) 札高養 第 11 次研究 4 年計画のまとめ 公開授業、研究発表 I、II、4 講座、 	<ul style="list-style-type: none"> 新システムに移行してから初めての全道大会
H18.4	南幌養護 H18-20 前川校長	<ul style="list-style-type: none"> 第 28 回研究大会 道南 7/31 ペテカリ 道央 9/15 余市 道北 9/22 美唄 道東 10/19-20 中札内 全道研修大会 10/ 地区の成果報告会、総会、研修会 第 13 次研究 3 年計画の 1 年目・ 	<ul style="list-style-type: none"> 課題～会員数の減少による会の維持の困難さ 全道研修会の開始
H19.4		<ul style="list-style-type: none"> 第 29 回研究大会 北特研大会 道南 7/30 伊達 (兼全道研修会) 道央 7/30 新篠津 道北 7/31 美深 道東 10/19 紋別 報告会 10/ 4 地区の成果報告会、総会 第 13 次研究 3 年計画の 1 年目・ 部会は、あいかわらず共通 4 部会 	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育元年 「北海道特別支援教育研究協議会」 北特研とてスタート 地区大会の開催を夏季休業中へ移行 全道研修会を地区大会に合体
H20.4		<ul style="list-style-type: none"> 30 周年 第 30 回北特研全道大会 7/29-30 南幌養護 480 名参加 部会、講演、総会、部会、全体会 4 部会と特設部会 	<ul style="list-style-type: none"> 地区大会を行わず全道大会のみ 特設部会を設置～特別支援教育と地域連携、発達障害児・者の支援
H21.4	余市養護 山本校長	<ul style="list-style-type: none"> 地区大会 	<ul style="list-style-type: none"> 総括事務局は 2 力年任期にもどる ★部会構成が 4 部会から 5 部会へ変更
H22.4		<ul style="list-style-type: none"> 第 31 回北特研全道大会 余市 (余市中央公民館) 	
H23.4	札幌養護 梅原校長	<ul style="list-style-type: none"> 地区大会 	
H24.4		<ul style="list-style-type: none"> 全特連全国大会 北海道大会 兼 第 32 回北特研全道大会 	
H25.4	新篠津高養 木村校長	<ul style="list-style-type: none"> 地区大会 ★5 部会と特設 小学部、中学部、高等部、訪問教育・重度重複障害、寄宿舎 	<ul style="list-style-type: none"> 地区ごとに特色のある特設部会を設置
H26.4		<ul style="list-style-type: none"> 第 33 回北特研全道大会 ★提言者、部会幹事の撤廃 	<ul style="list-style-type: none"> 在り方検討委員会
H27.4	豊明高養 池上校長	<ul style="list-style-type: none"> 地区大会 	<ul style="list-style-type: none"> 第三者委員会
H28.4		<ul style="list-style-type: none"> 第 34 回北特研全道大会 	